

HOME > PROJECT > XSCHOOL >
ローカルとグローバルがつながる未来に向けて【XSCHOOL福井プレゼンテーション後編】

PROJECT XSCHOOL2019

ローカルとグローバルがつながる未来に向けて【XSCHOOL福井プレゼンテーション後編】

「XSCHOOLプレゼンテーション福井」は後半へ。ゲストレビュアーの松島倫明さん、山崎亮さんと、プログラムディレクターの原田祐馬さん、坂田守史さんが登壇し、6チームのプレゼンテーションを振り返ります。

プレゼンテーションの前半はこちら→ ([レポート前半](#))



PROJECT



XSESSIONS

2021 PROJECT
ARCHIVE

2020 PROJECT
ARCHIVE

2019 PROJECT
ARCHIVE

2018 PROJECT
ARCHIVE

2017 PROJECT
ARCHIVES

2016 PROJECT
ARCHIVES

CONTACT

ゲストレビューのお二人は発表を聞いてどのように感じたのでしょうか。

松島：

ここまでのどり着くなかで生まれた各チームのドラマに興味を持ちました。120日間考えたことを10分で聞いてレビューするのは正直無理がありますが（笑）。1チームに対して1時間くらいじっくりお話ししながら、プロジェクトのスケールアップまで一緒に考えたかったですね。

山崎：

6チームのプロジェクトは、仲間が増えるプロセスでかたちが変わっていくものばかり。なので、今日発表したことがそのまま実現すれば嬉しいけど、ちょっとがっかりするかもしれません（笑）。これからどんな風にかたちが変わっていくか、どのチームもすごく可能性を感じましたね。



▲『WIRED』日本版編集長の松島倫明さん（左）とstudio-L代表の山崎亮さん（右）

安易なアウトプットはしない

発表では「本当にそのアウトプットでよかったのか」とレビューアから質問されたチームがいくつかありました。お二人の意図はどのようなところにあったのでしょうか。

原田：

今回の発表のなかで、「アウトプットのあり方」を問うシーンがあったかと思います。お二人は普段、どのようにプロトタイピングからアウトプットまでを考えていらっしゃるのでしょうか？



▲プログラムディレクターの原田さん

松島：

プロトタイピングは良いことですが、それ以上に仮説を立てることが大切だと思っています。仮説の強度が高ければ高いほど、その後の検証も確かなものになる。つくってみて違うなと思ったら、次に進めばいいと思っています。

山崎：

同じチーム内で、プロトタイピングするチームと検証するチームをつくって議論するやり方も効率的かもしれないですね。全員がプロトタイピングに関わると、止め時が難しいもの。「こんなのいらないよね」と、サラッとってくれる人が近くにいることは、実は大切だと思っています。

松島：

異文化のすり合わせや異質なものの同士のコミュニケーションを解決する方法は、人間と人間がぶつかることだと思うんです。だから「Talk Stay」のアプリはアウトプットとしては綺麗だけど、少し逃げに走っているなと感じてしまいました。テクノロジーは便利ですが、その使いどころが難しいですね。

山崎：

「笏谷石バンク」もその傾向は少し感じました。でもしっかりリサーチしているし、石の会社にまで行って登録を促す、そのあたりの泥臭さもあったので評価しています。あとはアプリやWebを使うきっかけをどう構築するのか、この点も考えることがありそうです。

坂田：

コンテンツをどう走らせていくかも気になっています。どのチームもなぜかFacebookページとInstagramページをつくっていたんですが、その後の運用の方が大変になのになぁと思っていました（笑）。



▲プログラムディレクターの坂田さん

松島：

プロジェクトは中身と外側を両方つくっていきますが、中身を置き去りにすると本末転倒ですよ。かっこいいシェアオフィスをつくっても、そこで何をすればいいのかわからないというところが、東京にもごまんとありますから。

地域の人がわかる言葉を使う、その真意

今回の発表では、地域のなかに入り込んで活動するプロジェクトがありました。レビューでは、「地域の方が普段から使っている言葉を使うこと」の大切さを語った山崎さん。これまでさまざまな地域に寄り添ってきた山崎さんの経験が詰まったアドバイスでした。



CONTACT

原田：

山崎さんが「ノカテ」チームの講評で仰っていた「余白」と「余分」の話は印象的でした。「余白」と「余分」って自分たちで発見した言葉だから思い入れもあるし使いたくなる。でも現場の人にとってはそんなに大事な言葉じゃない。山崎さん自身もこういう経験をされたことがあるんですか？

山崎：

ありましたよ。私が建築を学んでいる時は、「建物のかたちで印象づけ

るのではなく、中身をどんなプログラムにするかを考え、実現させる」という考え方に変わり始めた時期でした。しかし、プログラムがうまく組めすぎると、その枠から離れたたくなることに気づいたんです。例えば、アプリを先に思いつくと、プロジェクトの中身がアプリを使う前提のものになってしまう。そうすると、使い手が本当に使いやすいかという点が置き去りになってしまうんですね。

「余白」や「余分」のようなめっちゃくちゃいい言葉を思いついた時は、そのまま言葉が一人歩きしてもちゃんと伝わるのか確かめることが大切です。「これはいい意味で使ってる言葉なんです」と毎回誰かがつけ足さないといけなような言葉は、機動力が落ちてしまう。だからこそ、地域の方が使う言葉で考え、地域の方々が普段の暮らしのなかで動ける状態にしなければならないと思っています。



▲「プロジェクトが完成した時に、『自分たちがやった』と地域の人たちに思ってもらうことが大切」と山崎さん

テクノロジーと地域のこれから

雑誌『WIRED』日本版編集長として、テクノロジーの最先端を追いつけている松島さん。レビューのなかでも、地方都市が世界とつながる

新たな未来の姿を垣間見ることができました。松島さんのお話にワクワクした方も多かったのではないのでしょうか。

原田：

『WIRED』では、これからどうなっていくかわからないようなプロジェクトも紹介していますよね。以前、「大いなる実験」と仰っていたのが印象的で、すごいいいなと思っています。

松島：

ありがとうございます。『WIRED』は実験的なメディアなので、失敗するなら前向きに倒れようというスピリットがあります。未来のことなんて誰もわからない、だからこそポジティブな示唆を切り取りたいと思っています。

坂田：

「土着」にはローカルでアナログなニュアンスがありますが、テクノロジーのおかげで、あらゆる場所に「土着」を生み出すことができる時代になってきました。スピードの速い情報社会においても、未来にちゃんと根づくものをつくることができるのか。それともまったく違うアプローチがあるのか。それを考えるのも今回のXSCHOOLだったのかなと思っています。

松島：

「未来の土着」って10年くらい考えていられそうなテーマですね。(笑)。「Tonkan terrace」はすごくいい例で、デジタルテクノロジーがあるなかで、グローバルとローカルという両極なモノをどうやってつなぐかという点も面白かった。その可能性を考えることが、「未来の土着」になるのかなと思いました。

今世の中はあらゆるものがセンシングされていて、3Dスキャンすれば、デジタル上で誰もが同じものを持てるようになり、世界中どこでもアクセスすれば参加できるようになる時代がすぐそこまで来ています。

原田：

一方で、「Tonkan terrace」では、敷地内の低木を切ってみては、というレビューがとても興味深かったです。僕は何度もあの場所の写真を見ていたのですが、木を切るという視点は気づかなかった。どんなにテクノロジーが進み、デジタル上で世界中から参加できるような時代になっても、「木を切れば世界の見え方が体感的に変わる」といった実験は、結局はその場所にいるリアルな人たちがやっていかなければならないのだと感じました。



松島：

世界中にいる人たちとローカルで暮らす人をどのようにつなぎ、新しい都市をつくるのか。それが次のコミュニティデザインに必要な視点ではないかと思っています。デジタル上での体験がどのようにリアルな体験として結びつくかも考えていくと面白そうですね。



▲次号の『WIRED』や人工生命とコミュニティづくりの共通点、未来の祭りなど、さまざまな話題が繰り広げられました

XSCHOOLに感じたこれからの可能性

最後に、ゲストレビューアーのお二人からXSCHOOLに感じた可能性を語っていただきました



山崎：

「フレームがあるところにあてはめがち」という話は、自分が

XSCHOOLのようなプログラムをつくる时候にも必要だと思ひながら話してゐました。思ひつゐたフレームを一旦消して議論することゝ、地に足がついたプロジェクトになると思ひます。プロジェクトの成果をどんなアウトプットにするかも最後に決める。XSCHOOLはそういう進め方が向いてゐるなと感じました。

松島：

XSCHOOLをうまく言語化することは難しいのですが、企業とデザイン、その混ざり方が面白いと思ひてゐます。OBの人たちがメンターとして参加するのも素晴らしいですね。世の中のプロジェクトにはじまりも卒業もなく、すべてがプロセスだと思ひてゐます。120日で生み出したことを、これから先も考え続けながら、再び問を立て直してほしいなと感じました。

坂田：

XSCHOOLはこの4年で、ディレクターやメンバー、XSCHOOLに関心をもつてくださる方など、垣根のないコミュニティが育つてきました。こういう土壌ができたのはありがたい。土を耕すのはやはり人なのだなと感じてゐます。お二人もXSCHOOLのコミュニティの一員として、これからも見守っていただきたいと思ひます。今日はありがとうございました。

ラウンドトークの最後には、今期のXSCHOOLに伴走して下さったアドバイザーやパートナー企業から熱いメッセージをいただきました。



川崎和也さん（Synflux主宰／スペキュラティブファッションデザイナー）：

120日間おつかれさまでした。当初はワークショップに2回ほど参加させていただく予定が、結局ほぼ毎回福井に通っていました（笑）。そうさせた理由は、メンバーの力になりたいという想いもあるし、僕自身も大きな学びになったからです。福井発の6つのプロジェクトが世界に羽ばたくのを期待しつつ、これからもXSCHOOLのメンバーとして協力していきたいです！



佐々木千穂さん（株式会社インフィールドデザイン代表／エスノグラファー）：

最初、XSCHOOLはよくあるイノベーションワークショップかなと思

っていたのですが、まったく違いましたね。参加される人の食いつきが違うし、ワークショップを通して奇跡のようなことが起こっていました。今日発表されたプロジェクトが土着していくには、また変わっていくのではないかと考えています。チームを見守るアドバイザーとしてXSCHOOLに立ち会わせていただき、本当に感謝しています。



増田喜一郎さん（株式会社増田喜 代表取締役社長）：

これまで第三者に当社のことを考えてもらうことがなかったのですが、XSCHOOLでは当社に寄り添ったプロジェクトをつくっていただき、本当に感動しました。これからも地域に愛されるようなコミュニティをつくっていただきたい。当社から参加した3名の社員も、はじめは心配しながら見守っていましたが、最後まで笑顔でやりきってくれたことがすごく嬉しかったです。



島田昌和さん（日華化学株式会社 未来創造室）：

昨年度は会場パートナーとして、今年度はパートナー企業として参画させていただきました。これまでは少し遠巻きにXSCHOOLのことを見ていましたが、今回は実際にメンバーとして私も参加。当社から参加した20代社員の成長も感じることができました。120日間通して感じたことは「アメージング」の一言につきます！ みなさんにもぜひこのアメージングを体験していただきたいですね。

米澤稔夫さん（株式会社米澤物産 代表取締役）：

当社からは3名参加させていただきました。毎日彼らが試行錯誤している姿を見て心配したこともありましたが、彼らの変化に驚いています。さまざまな人と関わりながら新しいPJを立ち上げていく密度の高い時間は、会社のなかだけで経験できることではないと思っています。これからもやりきってほしいですね。

約120日間、「未来の土着」というテーマに向き合ってきたメンバーたち。自分ごとから地域、世界、地球規模にまで視野を広げ、過去・現在・未来に思いを馳せながら生み出したプロジェクトは、ここからがスタートです。各チームのこれからにどうぞご期待ください！



▲約120日間、おつかれさまでした！

text：石原藍 photo：片岡杏子

いいね！ 0

◀◀◀ PREV

|| Related article 関連記事



PROJECT XSCHOOL

CONTACT

福井に根づかせたい未来とは【XSCHOOL福井プレゼンテーション前編】

2016年からスタートしたXSCHOOLは、福井市がこれまで培ってきた歴史や文化、産業などの資源を活かしながら、ともに考え挑戦できる舞台をつくろうと、毎年プログラムを変…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

声なき声を探る120日間を経て【XSCHOOL東京プレゼンテーションレポート】

「未来の土着」をテーマに、約120間のプログラムを走らせてきたXSCHOOL。さまざまな視点から地域を見つめ、問いを投げかけてきた6チームが、ついにプロジェクトを披露す…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

発表目前！ 最後まで走り続ける【ワークショップ 最終回・後編】

プロジェクトの発表が目前に迫った最終回となるワークショップ。各チームのメンタリングを進めながら、2日目にはディレクターの多田智美さんによる企画書講座も開かれました。まず…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

発表目前！ 最後まで走り続ける【ワークショップ 最終回・前編】

2019年10月から始まった福井でのワークショップも、この第4回目がいよいよ最終回。アドバイザー・ディレクターらとの最終メンタリングを控え、緊張した面持ちのメンバーが多…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

東京2月2日（日）、福井2月8日（土）、プレゼンテーション開催決定！

次代をデザインする人のための小さな教室・XSCHOOLのプレゼンテーションを東京と福井で開催します！ XSCHOOLは、福井の文化風土や産業を探索し、社会の動きを洞察し…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

アイデアを磨きプロジェクトを生み出す 【第3回ワークショップ】

XSCHOOL2019のワークショップも折り返し地点。前回までのワークショップで、メンバーたちはパートナー企業の現場を見学したり、アドバイザーのレクチャーを受けたりと、…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

未来へ介入するデザインのヒント【第2回ワークショップ】

「未来の土着」をテーマにスタートした今期のXSCHOOL。10月の初回ワークショップでは6つのチームが結成され、パートナー企業の技術や社会課題、福井の地域性を読み解きな…

[MORE >](#)

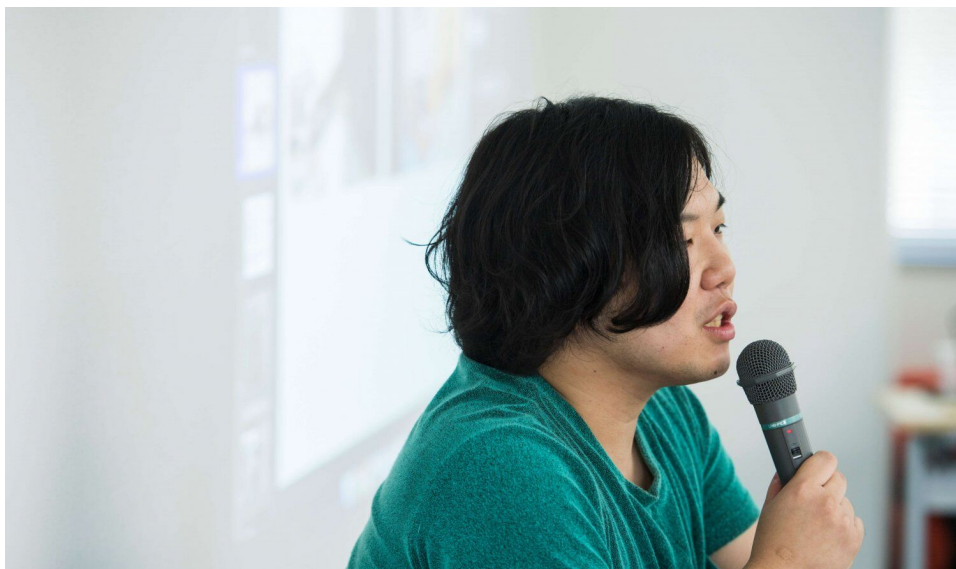


PROJECT XSCHOOL

XSCHOOL 2019がスタート！【第1回ワークショップ】

福井を舞台に新しいプロジェクトをつくり上げるXSCHOOLが、今年も始まりました。今年度はスタジオ形式の「XSTUDIO」からプログラムを再編。地元パートナー企業と、全…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

地域の土着性が未来に問いを投げかける 【XSCHOOLトレジャーハンティング・後編】

XSCHOOLトレジャーハンティング・前編では、3つのパートナー企業についてご紹介しました。リサーチ中には今期のXSCHOOLのアドバイザーでスペキュラティブ・ファッシ…

[MORE >](#)



PROJECT XSCHOOL

パートナー企業をたずねて【XSCHOOLトレジャーハンティング・前編】

2016年、福井市で次代のデザイナーを育む小さな教室「XSCHOOL」がスタートし、今年で4期目を迎えました。今年度は3つのパートナー企業から各社数名の社員が参加し、各…

[MORE >](#)

さらに読み込む

CONTACT



事業名 福井とつながる対流拡大事業 主宰 福井市
協力

国立大学法人 福井大学 産学官連携本部、公立大学法人 福井県立大学 地域連携本部、株
式会社福井銀行、株式会社福井新聞社

運営 株式会社福井新聞社、株式会社デザインスタジオ・ピネン

© 2025 未来につなぐ ふくい魅える化プロジェクト